

2024 「ことばの森教室」第4回優秀作品紹介

< 小学校5年生 > 作文課題「ぼく・私の宝物（大切なもの）」

5－① 「歌声は大切な宝物」

私は、1年生からコーラスの団体に入っている。始めた理由は、歌が好きで「みんなと歌うって、こんなに楽しいんだ」と、体験して思ったからだ。ところが、新型コロナウイルスの影響で、歌うことに制限がかかり、お客さんの前で歌う経験はほとんどなかった。けれど、歌うことが楽しかったからコーラスの仲間と歌い続けていた。

4年生からは、アルトパートをまかされた。アルトは音をとるのが難しいけれど、きれいなハーモニーで歌えると「やったぁ」と思う。昨年からは制限もなくなり、発表もできるようになった。敬老会では、私達の歌を聞いて泣いている人がいた。私達の歌がお客さんの心に響いたことが分かってうれしかった。「歌の力ってすごいな」と思った。保育所では、みんなが目をキラキラさせて見ていた。合唱祭では、お客さんから大きな拍手や手拍子をもらい、私もとびきりの笑顔で歌った。お客さんから「すばらしかった。感動した。」と言われ、飛び上がりそうになるぐらいうれしかった。

聞いてくれた人達の笑顔や言葉を思い出すと、勇気が出てくる。これからもたくさんの人に歌うことの楽しさを知ってもらい、笑顔を届けたい。そのためには、コーラスの仲間と一緒にたくさん練習して、もっとうまくなりたい。この世に一つしかない私達の歌を、これからもずっと大切にしていこうと思う。

5－② 「ぼくの宝物」

ぼくの宝物は、お母さんとお父さんだ。お母さんは、いつも最高に美味しいご飯を作ってくれたり、

ぼくの勉強を見てくれたり、分からない時は教えてくれたりもする。お父さんは、洗たくをしてくれたり、そうじをしてくれたりする。お父さんもお母さんも、仕事で忙しいのにぼくたちのために家の仕事もがんばってくれている。そんなお母さんとお父さんは、ぼくにとって大切な宝物だ。だから、ぼくは、お母さんとお父さんをいつも助け、大切にしていきたいと思う。

そのために、ぼくは日頃から朝ご飯の仕度を手伝うことにした。朝早くに起き、テーブルをふいたり、ヨーグルトを準備したり、ご飯をよそったり、お母さんのためにできることを考えてやってみた。また、お父さんのために、洗たくを手伝うことにした。家族みんなの服やくつ下などの洗たく物を洗たく機に入れたり、洗い終わった洗たく物を二階に運んであげたりした。さらに、そうじ機で床をそうじしたり、階段の手すりをふいたり、ざぶとんを干したり、進んで自分ができることをしてみた。

ぼくは、お母さんやお父さんのがんばっている姿を見て、「ぼくもがんばろう」と思った。だから、ぼくは日頃のお手伝いや習い事、学校のことなど、真剣に取り組んでいきたい。そして家族のためにがんばり、家族みんなから「本当にありがとう」と言ってもらえるようなことを、これからもしていきたいと思う。

5－③ 「かけがえのない友達」

「パーン」「ナイスキャッチ」ぼくたちは野球をしている。相手が打ったいい球を、友達がキャッチした。そして、見事ゲームセットで勝った。この時間はぼくにとって、かけがえのないものだ。なぜなら、友達と一緒にいるからだ。ぼくの宝物は友達だ。そう思った理由は3つある。

一つ目の理由は、友達はぼくのことを受け入れてくれるからだ。日々の授業で、自分たちでグループを作ることがある。グループを作る時に困っていると、「こっちにおいで。」とさそってくれる。ケンカをした時には、勇気が出なくて数日たってからあやまったこともあった。そんな時にぼくの友達

は、「全然大丈夫だよ。」と、受け入れてくれた。二つ目の理由は、友達はおくのことを安心させてくれるからだ。やけくそな時、学校へ行くと友達がいる。そして、「一緒に遊ぼう」「野球しようぜ」と、声をかけてくれる。一緒に遊んでいると、気持ちが晴れる。三つ目の理由は、友達はおくのことを成長させてくれるからだ。児童会選挙で友達が立候補し、おくが責任者を務めた時、今までにない発想や言葉が、おくの中で生まれた。おかげで、おくは話すのが得意になった。

だからおくは、友達のことが大好きだ。宝物である友達をこれからも大切にしていきたい。そして、おくも友達を受け入れ、安心させ、成長させてあげたい。だからおくは、友達の支えになっていきたいと思う。

5－④

「ずっとずっと」

「○○（名前）」と、私は一日に何回呼ばれるだろう。朝の仕度が遅い時の母の怒った感じの「○○」。お願い事がある時の優しい「○○」。がんばった時にほめられる「○○」。母の怒った「○○」は、最強に怖いので、「もう呼ばないで」ということもある。でも「○○」は私の宝物である。

一年前、いここが生まれた。おなかにいる時から、私達家族は生まれることをとても楽しみにしていた。赤ちゃんの名前の話になると、みんな笑顔になっていた。その時、名前には大切な人の思いがいっぱい詰まっているのだなと思った。生まれてくると、たくさん名前を呼んでかわいがっていた。ちょっと生まれてくる赤ちゃんがうらやましいなとも思った。でも、私が生まれてくる時も、同じだったのかなと思った。

みんなから呼ばれる「○○」は、心から人を愛し、心から人に愛される人になって欲しいという願いを込めて両親がつけてくれた。そんな存在になれるように、人に優しく接してみんなを笑わせるようになりたい。学校で過ごす時間や家族で過ごす時間も私の宝物。目には見えないけれど、友達と行

った林間学校や家族との旅行などのたくさんの思い出が詰まった「〇〇」になりたい。大好きな人からもらった名前という宝物を、ずっとずっと大切にしていきたい。

5－⑤ 「母さんとシロ」

私の宝物は、母さんとシロです。

私の家では、キジトラのメスとキジ白のオスの2匹を飼っています。この2匹は、元はのら猫の親子で、うちに来てそのまま居座っています。名前は、メスが「母さん」、オスが「おなか真っ白」（通称「シロ」）で、我が家の庭でくらしています。2匹はよくケンカをしますが、まあまあ仲が良いです。

「母さん」の性格は、執念深く、ずうずうしく、ぜいたくで、かしこいです。それに、甘えてくるくせに、さわると強烈なパンチを出します。「シロ」は、よくさわらせてくれますが、頭がちょっぴりくさいです。よく体に草がついています。

シロは、カリカリをそのまま食べますが、母さんはチュールがかかってないと不機嫌になります。2匹は、よくおやつを取り合いもしています。母さんにおやつをやると、シロがとんできて返りうちに合っています。

私は疲れた時に、2匹によくいやされています。たまにパンチが出るけれど、この母さんとシロの2匹は、私の大切な友であり、宝物なのです。

5－⑥ 「僕の大切な『知恵』」

僕の宝物は、「知恵」だ。なぜなら、自分の知恵はこの先もずっと残り続ける。そして、この知恵という宝物を活かすことができるのだ。

この知恵には、学校で得られる知恵、学習の知恵など、たくさんの知恵がある。この中でも、僕が一番大切にされていて大事だと感じた知恵は、学校で得ることができる学習の知恵だ。なぜなら、学校の知恵からはたくさんの得られるものがある。例えば、勉強の知恵は、計算ができるようになる。そして自分のためになるし、知恵を得ることによって、自分でも達成感、喜びを感じることができる。僕が算数の授業をしている時のこと、授業の意味が全く分からず、「どうすればいいのだろう」と鉛筆が長い時間止まってしまった。その時、先生や友達が優しく教えてくれて、やっと理解できた時に、「意味を知って、知恵を得て、繋げられるのはすごいことなんだなあ」と思った。

その他の知恵もある。家では、服のたたみ方をお母さんに教えてもらい、自分でたためるようになった。そして、皿洗いの方法を教わり、自分一人で洗えるようになった。この知恵は、これから役に立つ知恵だ。この生活の中にある知恵を、たくさん身につけた方が良いのだ。

このように、知恵をたくさん身につけて、知恵という宝物をずっと大切にしていき、明日、そしてこれからにその宝物を活かしていきたいと、強く思った。

5－⑦ 「一つの大事な宝物」

ぼくは今までの人生で唯一、一番大事な宝物があります。それは何かというと、ぼくの母です。どうしてかというと、母がいることで、自分の生活は楽しく笑顔になれるからです。

ぼくの母は、空手の日本代表コーチで、時々家にいない時があります。その時は、とても悲しい気持ちになってしまいます。なぜなら、いつも優しくて面白い母がいないと、自分は笑顔にもなれず、楽しい気持ちを持つことができないからです。でも母がいるからといって、いつも笑顔でいられるとは限りません。そのため母の笑顔を守りつつ、自分ができることをやって、母に恩返しをしたいです。母の笑顔を守るためにぼくができることは、ぼくがいつも笑顔で一生懸命がんばっている姿を母に見

せることだと思います。そのために、ぼくががんばりたいことは、母と一緒にやっている空手の目標を立てて、形や組手を一生懸命やることです。

このように、母の笑顔を守っていくためには、「ぼくが一生懸命がんばっていけばいいんだなあ」ということが分かりました。

5－⑧ 「僕の大切なもの」

僕の大切なものは、おじいちゃんの家です。

おじいちゃんの家は、ニードを登っていった所にあります。今おじいちゃんは入院していて、おばあちゃんが住んでいます。学校が終わって、友達と遊べる時には、おじいちゃんの家によってから遊びます。5年生の夏休みに、6回連続泊まって、そこから友達の所へよく遊びに行きました。

保育園の頃は、兄弟3人と一緒に泊まっていました。布団の中で遊んだり、おじいちゃんの畑で取れた野菜の上にかけて、「カレーそうめん」を作ってくれたりしました。それはとても美味しく、その頃僕はよく食べて大好きでした。今は、おじいちゃんが入院していて、作ってもらえないので、早く退院して、またカレーそうめんを作ってほしいです。

おじいちゃんの家は、美味しい物を作ってくれたり、布団で遊ばせてくれたりしたから、僕にとって大切な場所です。楽しい思い出がたくさんつまっている家です。その家に、おじいちゃんが早く帰ってきてくれて、また家に泊まったり、ご飯を食べさせてもらったりするのが楽しみです。僕が大きくなったら、おじいちゃんの手伝いに行きたいです。

5－⑨ 「美しき聖地」

「何だかとっても広いな」とぼくは言った。そう言った所は、ぼくがあこがれていた所、伊勢神宮

であった。5年の夏休みの中で、とても思い出深く、何ヶ月か経った今でも覚えている。

なぜ行きたかったかという、寺社巡りにはまっているからである。伊勢神宮には、何個もお社があった。その中でも、ぼくたちは正宮・別宮を中心に巡った。一日目に行った外宮は、これぞ伊勢神宮かと思わせるような雰囲気が出た。近くにある神社とは違い、建物がごうかでもなく質素でもなくて、びっくりした。二日目に行った内宮は、とっても広く見所がたくさんあった。外宮とは違う感じだった。父が「もう来れないだろうから」と、ご祈禱をあげた。ぼくは、七五三以外でご祈禱をされたのは初めてだったので、ドキドキワクワクしていた。祈禱が終わり、広さに驚いたままだった。三日目は、お土産を買って、フェリーに乗って山梨まで帰ってきた。

2つの正宮と14の別宮全て巡り、ぼくは大満足。そして、お守りやお土産もたくさん買うことができて、母も大満足。旅が無事に終わり、父・祖母・祖父はホッとしていた。まあ、とにかくみんな大満足で、自分の「あこがれの聖地」に行けて良かった。そして今では「あこがれの聖地」よりも「美しき聖地伊勢」という感じになっている。伊勢神宮のことは、今でも忘れられない一生の思い出として、ぼく・母・父の心に残り続けている。

5－⑩

「本の虫」

物心ついた時から隣には本があって、気づいた時には文字も読めるようになっていた。お気に入りの本は何十回も繰り返し読んだし、5年生になった今でも話の内容は覚えている。特に「おばけのおつかい」という絵本が好きだった。おばけの兄弟「さくぴー」と「たろぼう」がおつかいに行くというお話。作中で二人が食べる、葉っぱやどんぐりの味の飴やあなせんべい、くもの巣スープなど、小さい頃の私は、どれもとても美味しそうに思えて、どんな味なのか想像していた。

最近、紙の本が減ってきているようだ。電子書籍はスマホなどの電子端末があれば本を何冊でも読

めるし、便利な機能がたくさんある。その反面、電子端末の充電が切れると読めなくなるし、目が疲れてしまう。私は紙の本が好き。本を読み終わった後の「パタン」という音に、作者の思い、込められた思いの重さを感じる。本の破れた後もシミも、思い返せば懐かしい思い出で、「紙の本で、いいな」と思う。

物語はいつもハッピーエンドではない。今までの人生の中で、幸福を感じ、その分絶望もいやと言うほど感じた。本を読むのも好きで、文章を書くことも好きだけれど、それを本に書くのは勇気がいることだと思う。作家さんてすごいな。これからも私は本の虫。

< 小学校 6 年生 > 作文課題「あなたが幸せを感じる時間はどんな時」

6－① 「楽しく、明るく、元気に」

私が幸せだと感じている時間は、いつもの学校でのことだ。学校は私にとって、楽しくて大事な場所だと思っている。

学校の中で、一番幸せな時間は、友達や仲間と一緒に話をしたり協力して何かをやったりする時間だ。友達とお話をすると、元気になったり、とても盛り上がって楽しくなれたりするからだ。例えば、学校行事の話で盛り上がることもあるし、遊ぶ予定の話でたくさん笑ったりすることもある。また、友達や仲間といることで、思いっきり笑えたりするからだ。私は笑って過ごすのが好きで、笑うと楽しくなれるからたくさんお話をし、友達と一緒にいる。あと、仲間と一緒に何かに向かって作業する時も幸せな時間だ。協力してやると、できた時の達成感もうれしいし、やっている時もお話をしながらできるからだ。学校に来ると、こんなに幸せを感じる時があって、とても明るく楽しくなれるから、私はこのような時間が幸せを感じる。

友達や仲間と一緒に、話をしたり一つのことに向かって作業したりすると、楽しく明るく元気に

学校生活が送れる。だから私は、こんな時間が幸せだ。

6－② 「幸せは当たり前じゃない」

ぼくにとって一番幸せを感じる時間は、家族と過ごしている時だ。なぜかという、ただただ一緒にいるだけで心がいやされるからだ。

ぼくの家は共働きなので、いつも朝からバタバタしている。唯一夜ご飯はみんなでそろってゆっくり過ごせる時間だ。この時間が本当に幸せを感じる。一日の出来事や楽しかったことをみんなで話す。おもしろい話の時は、みんなで大笑いをする。みんなが笑顔になる最高の時間だ。ご飯の後、ソファに座ってみんなでテレビを見て一緒に笑ったり、クイズに答えたりする。そんな日常のおだやかな時間が、ぼくにとってはとても貴重でいやされる時だ。そんな毎日が当たり前にあると思っていたけれど、今年の4月からお父さんとお母さんの勤務体制が変わって、夜一緒にご飯を食べられない時があった。その時の夜ご飯は、少し静かで話しはするけれど、いつもみたいににぎわいがなくて少しさみしく感じた。

今の世の中は、毎日のように事件や事故などが起きていて、毎日当たり前のように幸せな時間を過ごしていたけれど、本当は当たり前ではないのかもしれない。実際に、お父さんとお母さんの勤務体制が変わっただけで、生活が変わった。だからぼくは、家族と一緒にいる時間、笑い合える時間をこれからも大切にしていきたいと思う。そして、いっぱい作りたい。

6－③ 「大好きな場所」

「ただいま」と行く場所。それは、ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんの家。ぼくのお母さんの実家だ。年に1回だけ、毎年夏休みに1週間ほど帰省する。その時が、ぼくにとって、とても幸せな時

間。

その時間は、何でかゆっくり流れていて、のんびりとしている。なぜそう思うのか、ぼくも不思議だ。だっておじいちゃんの家には、今回たくさんの人がいる。お母さんの兄弟やその家族と20人以上いる時もある。そして、近所の人などと、毎日にぎやかだ。子どもも多く、ケンカや泣く声もする。だから、「うるさいな」や「いやだな」と思うのが普通じゃないかと感じる。だけどぼくは、そんなおじいちゃんの家がのんびりできる。時間がゆっくり流れていて、心が落ち着くのだ。そして楽しくて、幸せだと感じる場所になる。

どう説明するのがしっくりくるのか、考えてみた。ホッとして、ただそこにいるだけでいい場所。何かをするために行くのではなく、ただただホッと一息するために行く。ぼくにとって、なくてはならない場所。たくさんの人が集まる場所。おじいちゃんとおばあちゃんに会える場所。幸せな場所。お母さんの実家は、大好きなおじいちゃんとおばあちゃんのいる場所。だからぼくは、幸せがいっぱいつまっているおじいちゃんの家が大好きで、大切な時間だ。

6－④

「幸せな食事の時間」

「今日の夕食は何だろう。」ご飯を炊いている時の、ほんのり甘い香りが、私をワクワクさせ、幸せな気分にしてくれる。どんなアロマでも、この香りに勝つことはできない。

母は、仕事で忙しくても、家族のことを考えて、夕食には炊きたてのご飯を用意してくれる。また、季節の変わり目には、四季に応じたご飯も登場する。春には、新タケノコを入れたタケノコご飯。夏には、地元の甘くてシャキシャキした歯ごたえ抜群の甘々娘のトウモロコシご飯。秋には、食欲の秋にぴったりのお腹をしっかりと満たしてくれる栗ご飯やさつまいもご飯。冬には、根菜がたくさん入った冬野菜の炊き込みご飯等、ご飯を見ただけで春夏秋冬を身近に感じることができる。現在、地球

温暖化等の影響で年々四季が分かりづらくなっている。そこで、毎日楽しみにしている家族が好きなご飯に季節の食材を入れて、味わいながら四季を感じられるように工夫してくれているのだ。

私にとって、家族全員がそろって食べる夕食は、体だけでなく心も元気満点にしてくれる幸せな時間だ。明日も頑張ろうと、優しく背中を押してくれる。何よりご飯は、和洋中どんなジャンルのおかずにも合う最強な食べ物で、おいしいご飯を毎日食べることができることは、幸せだ。これからもお腹いっぱい食べることができることへの感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたい。

6－⑤ 「温かいふとんって幸せ」

私は、毎日幸せを感じる時間がある。それは、毎日の朝と夜。ふとんに入っている時間だ。ふとんはふかふかで、身体全体が包み込まれるような感じがして、とても安心する。

私は冬に入る温かいふとんが大好きだ。誰にも邪魔されないような一人だけの時間ができて、自分のやりたいことが好きなようにできるからだ。しかし一番の理由は、これではない。冬は寒いため、温かいふとんの中はとても心地よい。「ストーブやこたつだって同じように温かいじゃん」と思うかもしれない。ふとんにはそれとは違って、電気代もかからないという良さもあるのだ。だからふとんに入ってゆっくりゴロゴロすることが、私にとっての一番の幸せだ。しかし、いつも私の幸せは同じ人によってこわされる。毎日、毎日大きな声で怒ってくる悪魔、お母さんだ。お母さんに怒られなければ、私はもっとふとんの中でだらけて、幸せに過ごせる。

私の幸せは、だらけてゴロゴロすることだから、何もせず平凡に過ごすことだと思った。そして、楽に過ごすのが、私は好きなんだと、この文を書いていて改めて思った。

6－⑥ 「身近な幸せ」

家族との時間は、当たり前のように思えても、当たり前ではなかったり、過ごせない人もいる。私は家族と過ごす時間が、とても大切に一番幸せな時間だ。

私の家では、夕食の時に、その日の出来事を話すことが多くある。家族全員、5人がそろうことはなかなかないが、家族全員がそろうと、とてもにぎやかになる。そして、一日どうだったか、誰が休んだなど、学校のことを話したりする。その時間が、私は一番幸せだと感じる。なぜかというと、家族と一緒にいたら、話したりするとほっこりするからだ。そして、家族が楽しく話していると、私も楽しくなるのだ。もちろん、友達と過ごすことも楽しくて、大切だ。修学旅行などは、とても楽しかったが、私はどこかさびしく思った。きっとそれは、家族と話すごがなかったからだ。毎日の何気ない会話を私は当たり前だと思っていた。だが、その時間は、私にとって、とても大切に幸せがたくさん詰まった時間なのだと気がついた。

家族との時間は、私の家族にしかない特別な時間だ。そして、幸せが身近にあって、誰にでもある時間ではないということがわかった。この時間には、限りがある。限りがあるからこそ私は、大切にしたいと思うし、その幸せを噛み締めたい。

6－⑦ 「毎日の会話」

「・・・でさ、面白かったよね。」「うんうん。」私は、この当たり前のような会話が好きだ。下校中に、一日の出来事を共有し合えるこの時間が。

「一緒にかあえろう。」友達が今日も誘ってくれる。私は笑顔で「うん、帰ろう。」と言う。いつも一緒に下校するメンバーは、私と2つ下の妹とその友達、それに同じ学年の3人の友達だ。下校する時には、その日楽しかったことや面白かったこと、自分が感じたことを話している。「今日の宿題、何分ぐらいかかるかな。」とか、「給食いっぱいお代わりしたんだ。」とか、「テスト難しかった。」と

か。同じ学年の同じ所で生活しているのに、一人ひとりが感じたり見たりするものが違う。それを知ったり、みんなで共有したりして笑うのが幸せだな、と感じる時間だ。話をしていると、「あ、違う感じ方をしたんだ」とか、「え、そんな出来事あったの」とか、新しいことを知ることができる。新しいことを知って、「じゃあ、今度はこうしてみようかな」「この場面だと、こう思ったのかな」と、また新しい考えが次々に出てくる。楽しい時間は短く感じるというけれど、考えていると本当にすぐに時間が経っている。もっと話したいと、毎日思っている。

毎日当たり前のようにしている会話。それを幸せだと思える私は、今とても幸せだ。

6－⑧

「もふもふの幸せ」

「お父さん、今日猫カフェ行ける?」「今日なら行けるよ。」「本当!やった!」私は猫が大好きだ。猫を飼いたいけれど、お母さんが猫アレルギーなので、飼うことはできない。そのため、私は猫カフェに行くことがすごく楽しみだ。猫カフェに向かう車の中でも、猫と何して遊ぶかとか、おやつは何をあげようかとか、色々なことを想像する。この考えている時間から、幸せは始まっている。

猫カフェに入った瞬間から、幸せは更に大きくなっていく。静かな空間で、猫と触れあえるのはとても幸せなのだ。餌をあげたり、おやつをあげたりすると、猫もうれしそうに食べる。猫カフェの猫は大人しくて、かまないので安心だ。たまに隣へ来てくれると、心がドキドキしてしまう。これは幸せを感じているからだと思う。一時間があっという間に過ぎてしまう。これも楽しく幸せな時間を過ごしているからだと思う。

帰る時間となって、少しさみしい気持ちになるけれど、さっき味わった幸せな時間を考えて、また次に猫カフェに行ける時を楽しみにすることにした。中学生になれば、子どもだけで猫カフェに入れるので、友達と一緒に行って、猫カフェのことを語ったり、猫にいやされたりしたい。そのことを考

えると、楽しみで、また幸せな気持ちになる。